

FADO 18

Abril 1998
月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL



月田秀子の昨日、今日、明日

巷では、赤ワインがブームになっていると言う。何やら健康に良いという事で、特に日の当たりの良い葡萄から取れたワインが良いらしい。値段の安いポルトガルワインもそのブームの余波を受け、いつもワインを安く提供してくれている岩田産業の岩田社長から、「もう、今日で、在庫が一本残らずなくなりました。」困惑した声で電話が入ったのは2月の末の事だ。父君の代から、コルクを扱ってきた関係と、少しでもポルトガルの為になつたらという思いで、ほとんど儲け抜きでポルトガルのワインを扱ってきた。ここ一ヶ月で一年分の赤ワインが出たと言う。このブームに乗じて大儲けするような輩と、一線を画する彼には、只々、戸惑いの中、忙殺されるような一ヶ月だったにちがいない。手ぬぐいで汗を拭き拭き話す彼の姿が、受話器の向こうに見えるようだった。

私にとっても一大事だ。ファドのライブには、というか、私には、今や不可欠なポルトガルの赤ワインである。太陽と土の匂いのするあの赤い液体が、私にポルトガルの記憶を蘇らせてくれるのだと言っても過言ではない。(どこかの宗教団体とは違う)

主体性のない、いとも簡単にブームに躍らされ右往左往する日本人がほとほといやになる、恐ろしさも添えて。

赤ワインが、体に毒だと言われても私は飲む。実らぬ恋を嘆き、歌い、浴びるほど飲み続け、ワインのような赤い血を吐いて、この世を去ったマリア・セヴェラをしのびながら、その晩のアートクラブのライブでは、嘗めるようにして、DAOの赤を口に含んだ。それは、初めての体験だった。「君が思い出す時はいつでもそばにいるよ。」どこかでそんな声があった。

今年になって2人の友が他界した。「ライブの時、客が私たち3人しかいないのに、熱唱してくれた姿が心に残って」と言って会員になってくれた心優しい東園貴代子さん。もう一人は、私が芝居に挫折し、青春の彷徨の最中に出会った「玄妙庵」のママ左達紹子さん。「月ちゃん、アホな事いっぱいしてやっと思付けた道や。頑張りや。」と言って、店の一番目立つ所にポスターを貼ってくれた。「一段落付いたら、あの世で、私達、はみだしもんの行ける店、つくってね。」アイシャドーもアイラインも引いていないママの顔を見るのは始めてだった。とてもきれいで穏やかな死に顔だった。

2月、朝日新聞大阪版に大きく載ったお陰で、3月の大阪でのライブは大入り満員。初めての札幌公演も、礼止めで、入場者数700名を越えた。名古屋の「エルム」でのライブも、なんと84名。諏訪での2度目のコンサートも、100名を越える盛況。皆、ファンの方々の目に見えない所でのご尽力があればこそと、心より感謝しています。

この不況の中、わたしのファドを聴くために足を運んでくださる方々を前に、逆境には慣れている月田は、大きな戸惑いを感じつつも、気負うことなく私の好きな歌を、精一杯歌ってゆこうと思います。これからも、変わらぬご声援をお願いします。

月田秀子

北海道への贈物

札幌・酒井誠一郎

人間を60年も続けていれば、ひょっとした一言や動作や関心が、意外な次の展開につながる位のことには十分心得ていますが、月田秀子さんとのご縁は、まさにその典型だったと思い返しています。ちょっと早めに結果がどうなったかと言えば、3月6日夕、札幌市の道新ホールで「月田秀子ファドを歌う」のコンサートが物凄い熱気に包まれて実現してしまつたのです。定員700席に対し、掛け値なく売れたチケットが700枚。それも2月末までに完売という好調さの背景を、その時点でよく分析してみるべきでした。ところが、企画ものに深い経験を持つ「専門家筋」は、「打率8割5分が限度よ」と自身満々。これにつられて50枚以上の「招待券」を配してしまいました。

で、どうなったと思われませんか? 何と打率9割7分5厘。お金を出して券を入手した人がほぼ完全に来場、という「考えられない現象」が生じました。当然、招待者の多くは立ち観、立ち聴き。何とも申し訳なく、主催者として心重く、しかし内心、これはやっただと不逞にも成功を喜んだりしながら、私も立ってコンサートの全部を拝聴しました。月田さんの第一声から最終の「難船」まで、会場全体が「こんな空間がよくも現出したものだ」と胸に迫るような張り詰めた雰囲気だったことを、しっかりと覚えています。

月田さんのコンサートの“北限”はこれまで盛岡だった、とうかがっています。一挙に津軽海峡を飛び越え、北海道内では事実上初めての「ファドの歌声」が響いた背景には、酒がという持つ縁という、極めて良い日本式の慣行がありました。場所是有名な札幌・ススキノ。地下1階にあるスペイン料理の美味しい店です。ぞっこんスペインに入れ込んでいるマスターが「一寸、これを聴いてみて」とかけてくれたのが、隣国・ポルトガルの心を謳い上げた月田さんのCDだった—という図式です。昨年2月頃だった、と思います。

相当に日本酒が回っていたから、などとほとんどもない。正直に、真面目に、グサリと参ってしまいました。では「このCDをいかにして入手し得るか」と尋ねた一言が、月田さんにこれまたソッコンの地元の淑女方との縁につながり、遂に私が責任者を務める「道新文化センター創立25周年記念コンサート」へと膨らんで行きました。京都へ、大阪へ、東京へと月田さんのコンサートの追っかけも辞さない彼女達の執念と粘着力は本当に迫力がありました。こちらは背中を押されるようにノロノロと動き、この間、月田さんとも数回、札幌でお会いし、寿司を食べ、酒を飲み、次第に意気投合し、初秋を迎えるころには「やりましょう」の握手を交わしていたのです。

「ファドって何?」— 企画会社「らむれす」の全面的な協力を得て、ポスターやチラシが出来上がった時期でもなお、この質問にはひんぱんにぶつかつたものです。さすがに昭和30年代の初めに映画「過去を持つ愛情」を観、アマリア・ロドリゲスの「暗いほしけ」を聴いたと推測される年輩の方々は物分りが良く? スナナリと受け止めてくれました。北海道新聞紙上での広告も十回を越え、その都度プレイガイドでの売れ行きが伸びて行ったようです。

コンサートが終わった夜、それももうすぐ日付けが変わるという時間に「北海道、札幌の人達は今晚、貴女から大きな贈物を戴いた」と月田さんに語つたことを記憶しています。ファドという魅力に富んだジャンルに直接触れることができ、少々大げさに言えば、世界がまたひとつ広がつたと感じているに違いない700の方々を代表し

(次ページへ続く)

て、といった気持ちから出た言葉でした。大きな贈物はこのあと、4月19日に小樽の近くの余市町（駐スペイン大使・坂本重太郎さんの出身地。長野オリンピック・ジャンプの金メダリスト・船木選手も同町出身）で、翌20日は函館市でも受けとることになるでしょう。少なくとも1年に1回は、道内のどこかで、月田さんの歌声を潮騒や吹雪の音や牛の鳴き声などをバックに聞かせてほしい、と願っています。

アルファマのファドバー
静岡・小嶋良之

昨年から今年にかけて、会社を退職して世界中の遺跡と聖地を旅している。ポルトガルへは、宗教都市ブラガと聖地ファティマ、そしてファドを聴きたくて訪れた。アマリアに代表されるリスボンのファド、そして学生たちが作ったコインブラファド。CDでは、何十回と聴いているもののどんな環境からこうしたメロディや詩が出来てきたのかを知りたかった。

ポルト、コインブラ、ナザレ、オビドス、リスボンと宿泊地ごとにファドバーを捜し回ったが、生憎と休みだったり、田舎には無かったり、演奏する曜日が合わなかったり、結局リスボンしか低く機会がなかった。

1日、現地のホテルとガイドに取材して、リスボンの下町・アルファマ地区の少し外れにある「セニョール・ヴィーニョ」というファドバーを訪れた。予約は午後9時30分。この位の時間から歌手が登場するのだ。勿論、日本人は1人だけ。数少ない2人掛けの席に案内されるが、ほぼ9割方座席は埋まっていた。ミニマム・チャージで水とつまみとワンドリンクが用意され、後は注文していく方式だ。照明は全体に暗くて、離れた席の客の顔は確認できないほど。ステージらしきものは無く、店の真ん中にギタリストの椅子が2つ置いてあるだけだった。照明は全体に暗くて、離れた席の客の顔は確認できないほど。ステージらしきものは無

く、店の真ん中にギタリストの椅子が2つ置いてあるだけだった。9時40分、1人目の比較的若手の女性歌手が登場した。まあまああの歌声に一応一安心。全方位に客が居るため、あっちを向いたりこっちを向いたり、バランスを取って歌いあげていく。3曲ほど、およそ10分歌って退場。以後、20分置きに、男性歌手と女性歌手が交互に登場してくる。これぞ、本場ならではの至極のファド漬け。歌手によってこんなにも多くのイメージが膨らんでくるものかと改めて実感した。

アマリアや月田さんのファドに侵されたためか、寂しげで力強い声質にどうしても靡いてしまう。只のいい声では満足できなくなっている自分に気が付いた。根本的に声質や発音が違うため、比較はできないが、月田さんのファドは、はらわたに響き、こちらのファドは、全体に頭に響く感じがした。午前12時を過ぎて、6人目に登場したお世辞にも美人とは言いがたい超ド迫力の歴史を刻んだような風貌の女性の声には驚いた。大地の奥底から這い込めてくるような低音部、それでいて高音部は、喜びを秘めた強引なほどの力を感じさせる。「これなんだよなあ、生で聴きたかったのは」と思わず心の中で呟いた。この歌手に、この声に出会えただけで、ポルトガルまで来た価値がある、そう思えるほど見事な響きだった。それだけに後から出てきたシンガーが軽く思ってしまうのだ。まだまだ続くファドバーを後にしたのは午前1時過ぎだった。

翌日はツアー客専用の有名なファドレストラン「オ・フォルカド」へ。店の真ん中にはちゃんとステージがあった。食事のあと、1時間ほどの間に4人の歌手の歌とフォークダンス。一人だけ黒マントに身を包んだコインブラファドの男性歌手が登場。風貌も声もそれなりに、観光バックながらまあまああの出来だった。ここでもステージ終了後、自分のCDやテープをテーブルを回って注文を取っていた。やはり本物のファドが聴きたければ、是非1人でファドバーへ行かれることをお勧めしたい。と同時に月田秀子のファドは日本の宝物だと再認識させられた。

vamos cantar !

今回は、700年以上の歴史を持つヨーロッパ最古の大学の一つコインブラ大学のある町コインブラを歌った「コインブラ」です。ジャック・ラリュエがフランス語の詩をつけた「ポルトガルの四月」は、イベット・ジローの歌声でシャンソンとしてもポピュラーな曲です。

コインブラ

訳詞 Caldo Verde

コインブラは
夢と伝統の学び舎
月明りが 我らのキャンパス
歌は わが師
恋人こそ 我が教科書
試験に通るのは
サウダー¹⁾の心を身につけた者だけ

はこやなぎの森 コインブラは
今なお ポルトガルの愛の都
今なお

その昔 コインブラは
うるわしきイネス²⁾の
愛の物語に涙した

歌の街 コインブラ
その優しい歌声に
我らの心は素直になる

学生の街 コインブラ
歌えど尽きぬ
愛の泉 我がコインブラ

COIMBRA

Letra José Galhardo
Música Raul Ferrão

Coimbra é uma lição
de sonho e tradição
O lento é uma canção
e a lua a faculdade
O livro é uma mulher
só passa quem souber
e aprende-se a dizer "saudade"

Coimbra do Choupal
ainda é capital
do amor em Portugal ainda

Coimbra, onde uma vez
com lágrimas se fez
a história dessa Inês tão linda

Coimbra das canções
tão meiga que nos põe
os nossos corações a nu

Coimbra dos doutores
para nós os teus cantores
A fonte dos amores é tu

注 1) サウダーデは、ポルトガルの国民性を象徴する言葉。語源は、ラテン語の solitate(孤独)。外国語では、一言では訳し切れず、日本語では、郷愁、懐旧の情、哀惜、懐かしさ、未練、孤愁、と様々に訳されている。過去への、遠くにある、または、失われた者、もしくは物に寄せる思い。

注 2) イネスの愛の物語とは、ペドロ 1 世とその王妃の侍女イネス・ド・カステロとの悲恋物語。陰謀で殺害されたイネスの亡骸を墓から掘り起こし王妃の椅子に座らせ、正式に結婚式をあげた。二人の棺はアルコバサのサンタマリア修道院に左右向かい合わせに安置されている。最後の審判の日、二人が蘇った時、一番に顔を見合わせる事ができるようにというペドロ 1 世の遺言通りに。

久しぶりに見た月田さん……

ネットサーフィンしながら某ハワイアン歌手のCDを探していたところ、「月田 秀子」の文字を見つけた。懐かしい響のある名前であった。彼女との出会いは2年ばかり前になる。日曜のある朝、TVをつけるとそこに彼女の姿があった。確かNHKであったと思う。その番組は小さな喫茶店で歌う彼女の姿や、人生を変えさせた歌「ファド」についての紹介であった。彼女の歌と人生に小生はひかれ、TVに見入ってしまった。小さな画面の中で歌う彼女の歌は彼女の人生を変えさせるには十分な哀愁が響き、小生を釘付けにした。画面の中から彼女が歌う店の名前を見つけよう、又、彼女の住居を見つけようと必死に覗き込んだが、手掛かりとなるものが見つからなかった。放送が終わった後、彼女が住むらしき所を車で走り回ったが見当たらなかった。同じ様に店も探し回ったが見当たらなかった。

そんな日の後、新聞で再び彼女を見た。よけいに彼女に会いたいという気持ちがつのってきてしまった。いたずらに日々が過ぎていったある日、友人の女性と「麓鳴館」という喫茶店に行った。ミナミにこんな所があるのかと思わせる、石畳の残る横丁に入った所にある小さな喫茶店で店の前には板張りの扉がまだ残っており、今思えばファドを歌うには適した寂れた景色が窓外にある静かで落ち着いた店であった。

彼女と話をしているうちに、ふと『月田 秀子というファドを歌う女性がTVで出ていてその場所がミナミの何処かなのだ』と言う話になった。彼女は昔から、その店のママとなじみであることから、ママにそのことを話すとそのTVでやっていたのはこの店で、月田さんの希望で日程を決めて場所を提供しているとのことであった。

何という偶然!! 嬉しさを覚えながら次に開かれる日を確認し、数日後その店へ時刻過ぎにその友人と訪れビールを呑み軽く食事をしながら彼女の現われるのを待った。

暫く待っていると彼女が現われた。小ぶりの姿でファドそのものの雰囲気漂わせた、TVで見た通りの顔だだった。ママに紹介をうけ、TVで見て探していたことやCDを探したが見つからなかった事等を話すと、CDなら手元にあるという。早速譲ってほしいと伝えると、黒い大きなバッグから出してサインをして譲って下さった。直に彼女に会い、尚且つサインのCDを譲って戴いた事は今でも心に残っている。(後日、友人に貸して聴かせたところ素晴らしいと絶賛していた。)

気がつくとい0人余の人が集まっていた。中には名古屋から来たと言う年配の女性も居られた。時間になり、彼女の歌が始まった。暗い灯りの中、ギターの色音が響き、そして静かに彼女の歌が始まった。静かに目を閉じ、彼女の歌を寸分も聴き漏らすまいと全神経を集中させた。始めて直に聴く彼女の歌であった……1曲2曲と聴いているうちに何故か涙が込み上げてきた……何故か解らない、ただ涙が出るのである。日本語では無い、見知らぬ国ポルトガルの言葉である。なのに悲しみが心を濡らしたのである。

歌は続いた……涙が止まらなく、ただ頭を垂れひたすら歌を聴き続けるのが精一杯だった。彼女の歌が終わり少し灯りが明るくなったが、顔を上げられずハンカチを取り出し涙を拭うだけ……素晴しかった……ファドがこんなにも心にしみいるとは……心をかき乱すとは……

それから1度だけ彼女の歌を聴きに行ったが、涙を流した事を思い出すが嫌でその店に行かなくなった。-----

暫くして、彼女のファドが忘れられずに店に行くと彼女はもう店には来ていないとの事。何件か小さな店でやっているとは聞いていたが、その店で聴きたかったので、ほかの店の情報は手にいれて無かった……

数ヶ月が過ぎ、サンケイホールで彼女のコンサートがあるのを知った。でも行かなかった……それは、ファドと言う歌が下町の貧しい人々が集まる小さな店で静かに歌われているものといった先入観や初めて聴いた彼女の歌と姿が小生の心に焼き付いていたからである。大きなホールで歌うことは彼女や多くのファンの望みであるかも知れない……今やビッグなファディスタに育った彼女を誉めたたえ、祝い、喜ぶ気持ちで一杯である。しかし、小生の心の中にはTVで放映されていた「麓鳴館」でひっそりと歌う彼女が全てなのである。又、ファドとはそういう歌であると思う。(彼

女の想いとはすれ違っているようにも想えるが……)できれば、あの時のようにあの場所で彼女の歌を聴きたいと常々想うばかりです。-----

意固地にならず、ファンならばホールに行き聴けばよいのでしょうかそれが出来ない……だからCDを買って部屋で静かにウィスキーを呑みながら静かに聴き……それが今の小生の精一杯の方法です。きっとあの麓鳴館で彼女のファドを聴かれた方なら小生の気持ちが解ると思うのですが……

月田 秀子 を愛する一ファンより

彼女の健康と健闘、そして幸せを祈って……

何時かポルトガルに行き彼女の足跡をたどる事を望みながら……

1998年1月15日

兵庫 / K. S

拝復 K. S様

メールありがとうございます。何度も読み返しているうちに、サンケイホールでのコンサート後の何とも言えない落ち込みの原因が何となく分かるような気がして、ペンを執りました。といってもワープロに向かってはいるのですが。

それは、ずーと長い間、そして、いつも感じていることなのですが、私も、本来、ファドは、何百人も入る劇場で歌う類の歌ではないという事、同感です。

しかし、現在、定期的に、大阪と京都のライブハウスで歌っていますが、月4回のライブでは、食って行けないという現実があり、かといって、回数をふやした所で、聴衆の数の少なさで、続くはずがないのです。例えば、大阪・心斎橋の「アート・クラブ」でのライブは、店のママの力添えもあって、毎回盛況であります。しかし、そこも30名程入れれば一杯になる程度のスペース。私たちギタリストを含めて、3名分の出演料を差し引きすれば、採算はほとんどと言うところでしょう。京都の「巴里野郎」での2日間のライブも平均すれば10名にも満たない現状で、大阪の南方「三裕の館」でのライブは、1月お客様が8名でした。有り難い事に、地方公演が、最近増え始め、何とかそれで食い繋いでいる現状です。けれど、交通費、宿泊費を考慮すると、多分主催者側は、赤字を出しながらの公演と察します。赤字を出さないようにすると会場を大きくするしかなく、その際には、動員力が問題になってきます。マイナーなアーティストの宿命というものなのかも知れません。でも、金銭に代えられない、人との出会いが私たちの活動を支えてくれています。それを、糧に、今年も、歌って行こうと思っています。

動員が大変ではありますが、年一回のサンケイホールでのギャラが私の活動費の源になっていることは否めません。

小さなお店を持つのが一番いい方法なのかも知れませんが、ギタリスト共々、共倒れになるのが落ちだろうし、それよりも、まだ当分は、ファド行脚を続けたいと思うのです。

イソップ物語の「ありとぎりぎり」ではありませんが、ぎりぎりす的な生き方しか私にはできないというのが結論なのでしょう。

ところで、麓鳴館でお会いしたときのことはっきり覚えていますが、あの時頂いた厚手のハترون紙(?)の名刺を出して電話してみましたが、通じませんでした。時は、確実に流れているのですね。木の葉のようにその流れに身を任せて、いつしか消えて行くのでしょうか。そう思うと、今こうして生きていることが妙に愛しくなるものですね。

もし、気が向いたら、南方の「三裕の館」にいらしてください。毎月第一水曜日8時からライブしています。唯一の生音ライブです。ワイン飲み放題とパンで5000円です。あなたが涙を見せたくないのなら、私が代わりに泣きましょう。

1998年1月18日

月田 秀子

informação

●ミルバ・ドラマティック・リサイタル '98 -ミルバ タンゴ《ピアソラ》-の、全国ツアーが6月から始まる。丁度10年前、私は、ポルトガル滞在中で生憎聴き逃してしまい、ビデオとCDで10年間我慢してきたのです。ピアソラ亡き後、彼の一番弟子であったビネッリがアルゼンチン五重奏団を率いて、ミルバと共に。大阪公演は、7月1日(水) サンケイホール。4月18日の一斉発売に先んじてお申し込み受け付けます(先着20名様迄)。お申し込みはお早めに喫茶「アルマ」 ☎06-554-3833(火曜定休)井本まで。

●北海道富良野市在住の渥美頼二氏(ファド倶楽部会員)の写真展「丘の写真館」-北海道富良野の四季-が大阪駅前 大阪マルビル3F「富士フォト・サロン」にて開催されます。これに合わせ「丘の写真館」フォト・エッセイ集(パウハウス刊 2,500円)が同時発売されます。4月10日(金)~16日(木) AM10:00~PM6:00(15日休館, 16日はPM3:00迄) 問合せ 富士フォト・サロン ☎06-346-0222
また4月上旬には「オブリガード・ポルトガル」-ポルトガルの旅 フォト・エッセイ集(北海道新聞社刊 1,900円)も発売されます。月田の事も書いてあるそうです。ご希望の方はファド倶楽部の方へご一報下さい。

●月田をギター、ヴォーカル、オカリナ等で、支えてくれている野上圭三のオカリナコンサートがあります。西インドに眼科診療所を建設する為のチャリティコンサートを、今回を皮きりに展開してゆくという事です。お問い合わせは大地母神(パチャママ) 06-458-3486 迄。『パチャママ・コンサート』 5月12日(火)6時会場/6時半開演 大阪・守口市駅前 エナジーホール

<月田秀子のスケジュール>

- 4月 1日(水) 大阪・西中島南方『三裕の館』 ☎ 06-304-1745
開演・8:00
ポルトガルギター:池側 忠, ギター:野上圭三
- 10日(金) 東京・大久保『風々々』 *要予約 ☎ 03-5389-0074
- 12日(日) 東京・六本木『カンデラリア』 *要予約 ☎ 045-713-6277(斎藤)
▼カンデラリアオーナー高野太郎氏(タンゴ)との初ジョイントライブです。
- 19日(日) 北海道・余市『ニッカウキスキー』 *要予約 ☎ 0135-23-5714 (月田秀子を余市で聴く会事務局)
- 20日(月) 北海道・函館『金森ホール』 *要予約 ☎ 0138-23-0338
- 21日(火) 青森『グランベリー』 *要予約 ☎ 0177-43-0762(鳴海)
- 23日(木) 京都・四条河原町 シャンソニエ『巴里野郎』 ☎ 075-361-3535
(1)8:00 (2)9:00 (3)10:00 (入れ替えなし)
ポルトガルギター:池側 忠, ギター:野上圭三
- 24日(金) 京都・四条河原町 シャンソニエ『巴里野郎』 ☎ 075-361-3535
(1)8:00 (2)9:00 (3)10:00 (入れ替えなし)
ポルトガルギター:池側 忠, ピアノ:河村真千子
- 26日(日) 広島『ゲバントホール』 ☎ 082-239-1979(宏林音楽事務所)
▼シャンソンの日高まりさんとのジョイントコンサートです。
- 27日(月) 大阪・心斎橋『アートクラブ』 ☎ 06-253-0827
(1)8:00~3回ステージ(入れ替えなし)
ポルトガルギター:池側 忠, ギター:佐野健二
- 5月 6日(水) 大阪・西中島南方『三裕の館』 ☎ 06-304-1745
- 9日(土) 奈良・学園前『中村邸』 *要予約 ☎ 0742-48-5215
- 15日(金) 東京・杉並『長島葡萄房』 *要予約 ☎ 0426-35-4557(カルド・ヴェルデ 柳瀬良子)
▼定評あるイタリア料理によるディナーショーです。(会費8,000円)
- 17日(日) 鳥取・米子『ホテルサンルート』 *要予約 ☎ 0859-22-2489(三木隆子)
-チャリティコンサート(国際ソロブチミストスワン米子主催)-
- 23日(土) 岐阜・恵那『坂下教会』 ☎ 0573-75-4673(木下)
- 25日(月) 大阪・心斎橋『アートクラブ』 ☎ 06-253-0827
- 28日(木) 鹿児島『五木寛之論案会』 ☎ 06-311-0618(スミセイライフミュージアム)
- 29日(金) 京都・四条河原町 シャンソニエ『巴里野郎』 ☎ 075-361-3535
- 6月 3日(水) 大阪・西中島南方『三裕の館』 ☎ 06-304-1745
- 7日(日) 大阪・堂山町『バナナホール・きまぐれライブ』 *要予約 ☎06-345-5063(サンケイ企画)※チラシ参照
- 13日(土) 長野・蓼科『四季の森ホテル・上海外灘』 ☎ 0267-55-6258(岡田)
▼蓼科牧場を渡る風の中、多忙な日常を離れて、おいに飲み、食べ、語り合いませんか。
宿泊パック(13,500円)もあります。
- 20日(土) 奈良・大和高田『さざんかホール - ファドコンサート』 ☎ 0745-53-8200 ※チラシ参照
- 25日(木) 京都・四条河原町 シャンソニエ『巴里野郎』 ☎ 075-361-3535
- 26日(金) 京都・四条河原町 シャンソニエ『巴里野郎』 ☎ 075-361-3535
- 29日(月) 大阪・心斎橋『アートクラブ』 ☎ 06-253-0827
- ※7月1日『三裕の館』でのライブはお休みさせていただきます。

<編集後記>

歯茎の手術で、右頬はげんこつ館をしゃぶったように腫れあがり、まるで穴戸錠なみの顔。術後、一週間は歌えないと言う事で、名古屋・諏訪の公演から帰った翌日、決行。お粥、雑炊を流し込む毎日。たまに食べる白粥も、去年漬けた梅干しを添えてなかなか美味。そんな中、T君を巻き添えに18号発射。(月田)

月田秀子ファド倶楽部 ホームページ
<http://www.osk.3web.ne.jp/~fh/index.htm>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第18号
- 1998年4月1日発行(季刊:年4回発行)
- 編集・発行 「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒543-0023 大阪市天王寺区味原町 2-10 エヌケイビル 502号
- TEL&FAX 06-765-4808